





マジックソフトウェア・ジャパン／奏風システムズ

「仕様を100％理解するのは困難」

開発して、見直すスタイルで信頼を得る

超高速開発に取り組む企業が、年々、増えている。中でも、30年にわたって3万5000社以上の導入実績を持つ「Magic xpa Application Platform」は、ビジネスの変革を目指すユーザー企業だけでなく、パッケージソフト開発の基盤としても利用されている。また、活用を継続しているシステムインテグレーターには、開発して、見直すスタイルによって、顧客との関係に好循環がもたらされているという。



マジックソフトウェア・ジャパン株式会社
マーケティング部 マネージャ
渡辺 剛 氏



奏風システムズ株式会社
代表取締役
赤塚 剛 氏

超高速開発の導入意向が拡大 ニーズを反映し製品はさらに進化

超高速開発に注目が集まっているものの、いまだ導入に二の足を踏んでいる企業も少なくない。しかし、超高速開発という言葉が登場する以前から、同様の機能を提供するツールは存在していた。その1つがマジックソフトウェアが提供するアプリケーション開発・実行プラットフォーム「Magic xpa Application Platform」（以下、Magic xpa）である。

「すでに20年以上、多くの企業でMagic xpaは使われています。『どこまで使えるのか？』と迷うフェーズはもう終わりではないでしょうか。先行して導入した企業は、そのメリットを享受し続けているのです」とマジックソフトウェア・ジャパンの渡辺 剛氏は話す。

実際、Magic xpaは、すでに豊富な実績を持っている。

国内販売活動を展開する同社のパートナー数は800社以上、ユーザー企業数は3万5000社以上にものぼる。しかも、長年の実績の中で、製品は顧客の声を反映し、様々な進化を続けた。特に超高速開発が注目を浴び始めたここ数年の進化は著しい。

例えば、Magic xpaは、マルチデバイスに対応したアプリケーションをワンソースで開発・デプロイすることが可能。OSやデバイスに依存しないので、バージョンアップやプラットフォームの変化にも柔軟に対応し、移行も容易に行える。

「オンライン画面の作成、バッチ処理、DBスキーマの自動生成、実行サーバーの拡張性や耐障害性の確保など超高速開発に求められる機能も網羅しています」と渡辺氏は話す（図1）。

図1 Magic xpa Application Platformの提供機能

製品名		Magic xpa	B	C	D	F
オンライン画面	Windows	○	×	△	×	◎
	Web	○	×	△	○	×
	モバイル	○	×	△	△	◎
バッチ処理		○	◎	△	○	×
DBスキーマの自動生成		◎	—	○	—	—
実行サーバーの拡張性／耐障害性		◎ (IMDG)	△	△	△	△

長年の実績の中で、顧客の要望に応えながら機能を拡充。Magic xpaだけで高品質・高信頼のビジネスアプリケーションを開発できる

高い信頼性が評価され パッケージソフトの基盤にも採用

自動車向けエレクトロニクスメーカーの富士通テンは、Magic xpaを活用している一社だ。20年以上前からMagic xpaを様々なシステム開発に役立てており、近年では、ホスト上の生産系基幹システムのオープン化を実現した。

他にも、学研、スパリゾートハワイアンズ、福島銀行など、様々な企業がMagic xpaを採用している。

ユーザー企業だけでなく、ソフトウェアベンダーなどが、パッケージソフトの基盤として活用するケースも多い。これらは、Magic xpaの信頼性の高さを証明する事例といえる。国内だけでも、300種以上のパッケージソフトが流通している。その多くが業種・業務に特化しており、福祉、アパレル、宝飾、タクシー、出版など、その市場で大きなシェアを占めている製品も多い。しかも、パッケージソフトでありながら、変更・修正が容易なMagic xpaの特性を生かし、ユーザーの独自仕様にカスタマイズして導入されるケースも少なくない。

SIベンダーの開発スタイルを変革 速く作れるから現場の意識が変わる

Magic xpaによる開発生産性の向上、開発プロセスの変革は、ともすれば対立関係に陥ることもあったユーザー企業とシステムインテグレーターの関係にも好循環をもたらすという。

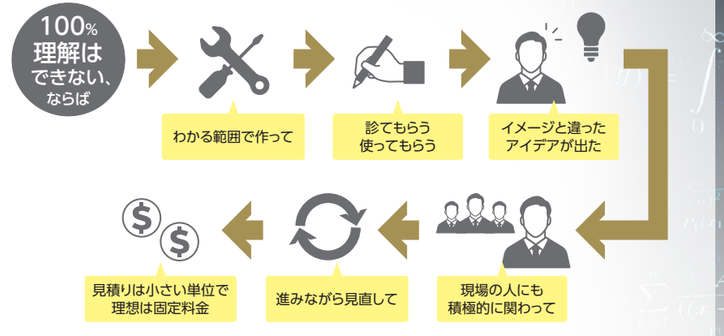
新潟県に本拠を置く奏風システムズは、マジックソフトウェア製品を核にしたビジネスアプリケーションの企画・開発・導入支援・サポートを幅広く手がけている。

「Magic xpaは、システムと情報を可視化できるのが強み。開発生産性の向上はもちろん、誰が作っても同じようなプログラムになることから、システムがブラックボックス化することなく、後からプログラムを追跡して、素早く安全に改修・拡張を行える。システム領域も、フロントエンド／バックエンドシステム、クライアント／サーバーシステムやWebサービス、モバイル対応など、あらゆる要望に柔軟に対応できます」と奏風システムズの赤塚剛氏は話す。

過去のバージョンから最新バージョンまで一貫して変わらない思想を堅持しつつ、最新技術を取り込み続けていることを評価し、多くのユーザー企業が、過去の資産を継承しながら、長年にわたって使い続けているという。

このようなMagic xpaを活用したビジネスの中で、赤塚氏は先に述べた顧客との関係の好循環を感じているという。「従来型の開発とは違い、作ってみて、ユーザーの要望を聞きながら修正を加え、システムを完成させていくというプロセスを通じて、双方が同じ方向を向くことができるからです」（赤塚氏）（図2）。

図2 顧客と共に歩む超高速開発手法



ポイントは顧客の要望をわかる範囲でまず形にすること。そこから、現場も巻き込んで課題の洗い出しを行う。顧客と共に開発を進めることで、システムの精度が上がり、信頼環境も強固になる

奏風システムズが手掛けた、ガス器具を製造・販売するサンコーの開発事例はその好例だ。

伝票発行システムの開発にMagic xpaを活用することで、仕様をもとにすぐにプロトタイプを作り、検証評価を繰り返すアジャイル開発を実践。「検証評価の結果、課題があれば修正し、すぐに機能を追加。開発サイクルの中で生まれた新たなアイデアも柔軟にシステムに反映しました」と赤塚氏は話す。

開発を進めていく中で多様なサブシステムが完成し、モデルやデータ、プログラムのリポジトリが充実していった。そのリポジトリを活用することで、システム構成要素のパーツ化、標準化、共通化が加速。その結果、新機能の開発から稼働までをわずか3日で実現したこともあるという。

「お客様の要望を100％理解するのは難しい。理解できないならば、わかる範囲で作って、現場の人にも積極的に使ってもらいながら、見直していくスタイルが有効。その過程で信頼関係が醸成されていきます。伝票発行システムから始まったプロジェクトは、発注管理や仕入管理、全数検査、製品不良管理、製品在庫管理など多様なサブシステムとの連携を実現。最終的にMagic xpaは、サンコー様の全社を支えるトータルシステムへと成長しています。今では、『システムは開発したら終わりではなく、お客様とのパートナー関係の本当のスタート』と考えるようになりました」と赤塚氏は語る。

現在は、モバイルアプリを活用した作業実績管理システムの開発に加え、基幹業務を担うシステム全体の再構築プロジェクトが進行中だ。

ユーザー企業、ソフトウエアベンダー、そしてシステムインテグレーターまで、急速に拡大する超高速開発の波は、IT業界のビジネスを大きく変えることになりそうだ。

お問い合わせ

マジックソフトウェア・ジャパン株式会社
マーケティング部
または各営業所（札幌、仙台、信越、名古屋、大阪、広島、岡山、福岡）

TEL：03-5937-3300（代表） E-mail：japan_solution@magicsoftware.com
URL：http://www.magicsoftware.com/ja